

期 昭和五十九年十月二十二日～十一月十日  
於 図書館三階閲覧室（本館）

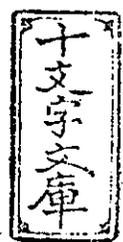
仮名草子

仮名草子とは、一口にいえば、漢字で書かれたものに対して、仮名書きされた書物のことであるが、文学史的には、江戸初期から前代の御伽草子に変わり、人々の間に広まった読み物である。物語・小説を中心として、説話集・随筆などを含み、啓蒙教訓を目的として書かれたものが多い。作者には、鈴木正三・浅井了意ら武家出身者も多く、寛永以降絶えず出版され、寛文・延宝頃が最も盛んであった。

(1) 薄雪物語（うすゆきものがたり）（黒川文庫）

版本二冊（上・下巻）美濃判 絵入 江戸 出雲寺萬次郎板 天保十五年（一八四四）刊 十文字文庫蔵印（三村清三郎）あり。薄雪物語の構成は、往來物（消息文）の形体を用いているが、一般的な往來物と相違して、書簡体小説あるいは艶書小説とも言うべきものである。この作品の影響を受けて、「錦木」、「新薄雪物語」など数多くの艶書小説が刊行された。この版本は、二段組にして、上欄に、和歌の語釈（上巻）、代表的な恋歌（下巻）をあげている。

○ 十文字文庫（三村清三郎）蔵書印



(2) 錦木（にしきぎ）（常磐松文庫）

版本五冊（五巻）美濃判 絵入 無刊記 外題「にしき木」初版は、寛文元年（一六六一）刊。この版本は、その後重版されたもの。恋のさまざまな相を目錄に出し、その艶筆を掲げる恋の文尽しである。「薄雪物語」の影響を強く受けている。錦木とは、昔、文字のない国で、恋文の代用をした三十纏ばかりの彩色した木のことをいう。

(3) 新にしき木物語（常磐松文庫）

版本五冊（五巻）美濃判 絵入 十一行書き 無刊記 一名「あづま賢女鑑」 艶書を中心とした作品で、「新うすゆき物語」と内容的に、ほとんど変わりがなく、主人公の名称及び、結末が悲劇ではなく、幸福になるという点に相違があるだけの焼き直し風の作品である。

(4) 二人比丘尼（ににんびくに）（特殊資料室別置）

鈴木正三作 美濃判 絵入 江戸 松会開板 寛文五年（一六六五）刊 世の無常を知った二人の女が出会い、その内の一人が死に、その死体が十七日三十五日と日がつにつれ腐乱し、白骨化する。その有様を見た女が、つくづく無常迅速の理を悟り、尼となるという話。刊記の「松会開板」は、江戸期を通じて手堅い出版をした書肆。

(5) 可笑記（かしょうき）（黒川文庫）

如儻子作 美濃判 無刊記 「浅草本法寺」の蔵印あり。版本三冊（五巻） 奥に「寛永十三孟陽中韓江城之旅泊身筆作」とあるので、この時期完成したと考えられる。

約四百項目の短文を集めたもので、偶感的随筆文である。  
作者は、飾らずに不平不満をぶちまけ、その直截簡明な文体が、当時の人々に  
受けたという。

○ 浅草本法寺蔵書印

